

葛の葉狐

楠山正雄

むかし、摂津国せつつのくにの阿倍野あべのという所ところに、阿倍あべの保名やすなと
いう侍さむらいが住すんでおりました。この人なんだいの何代まえか前の
先祖せんぞは阿倍あべの仲麻呂なかもろという名高なだかい学者がくしやで、シナへ渡わたつ
て、向むこうの学者がくしやたちの中まじに交まじつてもちつとも引ひけを
とらなかつた人てんしです。それでシナしなの天子てんしさまが日本にっぽんへ
還かえすことを惜おしがつて、むりやり引ひき止とめたため、
日本にっぽんへ歸かえることができないで、そのまま向むこうで、一
生しょうく暮くらしてしまいました。仲麻呂なかもろが死しんでからは、
日本にっぽんに残のこった子孫しそんも代々だいだいいなか田舎いなかにうずもれて、田舎侍いなかざむらい

なつてしまひました。仲麻呂なかまろの代だいから伝つたえた天文てんもんや
数学すうがくのむずかしい書物しょもつだけは家いえに残のこつていますが、だ
れもそれを読よむものがないので、もう何百年なんねんという間あいだ、
古ふるい箱はこの中にしまひ込まれたまま、虫むしの食くうにまかし
てありました。保名やすなはそれを残ざん念ねんなことに思おもつて、ど
うかして先祖せんぞの仲麻呂なかまろのような学者がくしやになつて、阿倍あべの
家を興おこしたいと思おもひましたが、子供こどもの時ときから馬うまに乗のつ
たり弓ゆみを射いたりすることはよくできても、学問がくもんで身みを
立てることは思おもひもよらないので、せめてりつぱな
子供こどもを生うんで、その子こを先祖せんぞに負まけないえらい学者がくしやに
仕立したてたいと思おもひ立たちました。そこで、ついお隣となりの

和泉国いずみのくにの信田しのだの森もりの明神みょうじんのお社やしろに月詣りつきまいをして、ど
うぞりつぱな子供こどもを一人お授けさず下さいましと、熱心ねっしんに
お祈りいのをしていました。

ある年としの秋あきの半ばなかのことでした。保名やすなは五六人にんの
家来けらいを連れて、信田しのだの明神みょうじんの参詣さんけいに出かけました。
いつものとおりお祈りいのをすましてしまいと、折おりか
らはぎやすすきの咲さき乱みだれた秋あきの野のの美うつくしい景色けしきを
ながめながら、保名主従やすなしゆじゆうはしばらくそこに休やすんで、
幕張りまくばの中でお酒盛りさかもをはじめました。

そのうちだんだん日かたむが傾かたむきかけて、短みじかい秋あきの日は
暮れくそうになりました。保名主従やすなしゆじゆうはそろそろ帰かえり支度じたく

をはじめますと、ふと向むここの森もりの奥おくで大ぜいわいわ
いさわぐ声こえがしました。その中には太鼓たいこだのほら貝がい
の音おとも交まじつて、まるで戦争せんそうのようなさわぎが、だん
だんとこちらの方ほうに近づちかづいて来きました。主従しゅじゆうは何事なにごと
がはじまったのかと思おもつて思おもわず立たちかけますと、そ
の時ときすぐ前まえの草叢くさむらの中で、「こんこん。」と悲かなしそうに
鳴なく声こえが聞きこえました。そして若い牝狐わかめぎつねが一匹びき、中なか
ら風かぜのように飛とんで来きました。「おや。」という間まもな
く、狐きつねは保名やすなの幕まくの中に飛とび込こんで来きました。そし
て保名やすなの足あしの下で首くびをうなだれ、しつぽを振ふつて、さ
も悲かなしそうにまた鳴なきました。それは人おに追おわれて逃に

げ場^ばを失^うつた狐^{きつね}が、ほかの慈悲^{じひ}深い人間^{にんげん}の助^{たす}けを求^{もと}めてゐるのだということはすぐ分^わかりました。保名^{やすな}は情^{なさけ}け深い侍^{さむらい}でしたから、かわいそうに思^{おも}つて、家来^{けらい}にかつがせた箱^{はこ}の中に狐^{きつね}を入れて、かくまつてやりました。すると間^まもなく、「うおつうおつ。」というやかましい鬨^{とき}の声^{こえ}を上げて、何^{なん}十^{にん}人^{にん}とない侍^{さむらい}が、森^{もり}の中から駆^かけ出^だして来^きました。そしていきなり保名^{やすな}の幕^{まく}の中にばらばらと飛^とび込^こんで来^きて、物^{もの}もいわずにそこらを探^{さが}し回^{まわ}りました。

この乱暴^{らんぼう}なしわざを見て、保名^{やすな}はかつと腹^{はら}を立てて、「あなたはだれです。断^{ことわ}りもなく、出^だし抜^ぬけに人の

幕まくの中に入はいつて来くるのは、乱暴らんぼうではありませんか。」

ととがめました。

「生意氣なまいきをいうな。我々われわれがせつかく見みつけた狐きつねが、この幕まくの中にに逃げ込こんだから探さがすのだ。早く狐きつねを出だせ。」

とその中かしらぶんの頭分あらしい侍さむらいがいました。それからふたことみこと、二言三言いい合あつたと思おもうと、乱暴らんぼうな侍さむらい共どもはいきなり刀かたなを抜ぬいて切きつてかかりました。保名やすなも家来けらいたちもみんな強つよい侍さむらいでしたから、負まけずに防ふせぎ戦たたかつて、とうとう乱暴らんぼうな侍さむらい共どもを残のこらず追おい払はらつてしまいました。そして箱はこの中ににかくしておいた狐きつねをさつそく出だした。

して、その間に逃がしてやりました。狐はまるで人間が手を合わせて拝むような形をして、二三度拝んだと思うと、さもうれしそうにしつぽを振って、草叢の中へ逃げて行つてしまいました。

狐の姿が見えなくなつたと思うと、また向こうの森の中で、先よりも三倍も四倍もさわがしい人声がしました。保名が驚いて振り返つて見るひまもなく、すぐ目の前に一人、りっぱな馬に乗つた大將らしい侍を先に立てて、こんどは何百人という侍が、一塊になつて寄せて来て、保名主従を取り囲みました。そこで又ははげしい戦がはじまりました。

やすなしゆじゆう
保名主従は幾ら強くつても、先刻の働きでずいぶん
つか
疲れている上に、百倍もある敵に囲まれていることで
すから、とても敵いようがありません。保名の家来は
この
残らず討たれて、保名も体中刀傷や矢傷を負った
やすな からだじゆうかたなきす やきす お
上に、大ぜいに手足をつかまえられて、虜にされてし
てあし とりこ
まいしました。

この馬に乗った大將は、やはりお隣の河内国に住
うま の たいしろう となり かわちのくに す
んでいる石川悪右衛門という侍でした。奥方がこの
いしかわあくうえもん さむらい おくがた
ごろ重い病にかかって、いろいろの医者に見せても
すこ くすり き め み
少しも薬の効き目が見えないものですから、ちよう
ど自分のにいさんが芦屋の道満といって、その時分
じぶん あしや どうまん じぶん

名高なだかい学がく者しやで、天子様のおそばに仕つかえて、天文てんもんや占うらないでは日本にっぽん一の名人めいじんという評判ひやうばんだったのを幸さいわい、あるときときあくうえもん時悪右衛門は道満どうまんに頼たのんで、来きて見みてもらいますと、奥方おくがたの病氣びやうきはただの薬くすりでは治なおらない、若い牝狐わかめぎつねの生いき肝ぎもを取とつてせんじて飲のませるよりほかにないということでした。そこで信田しのだの森もりへ大ぜい家来けらいを連つれて狐狩きつねがりに来きたのでした。けれども運悪うんわるく、一日森の中にちもりを駆かけ回まわつても一匹びきの獲物えものありません。すっかりかんとやくをおこしてぶんぶんしながら引き上あげようとしますと、ひよつこり、親おやこ子びき三匹きつねの狐なが長ながいすすきの陰かげにかくれているのを見みつけました。大喜おおよろこびでさつ

そく大ぜいかかりますと、狐きつねは驚おどろいて、牝牡めすおすの狐きつねはとうとう逃にげてしまいましたが、まだ若い小狐わかこぎつねが一匹びき逃にげ場ばを失うしなつて、大ぜいに追おわれながら、すばやく保名やすなの幕まくの中まで逃にげ込こんだのでした。

こうしてせっかく手てに入れかけた狐きつねを横合よこあいから取とられてしまったのですから、悪右衛門あくうえもんはくやしがつて、やたらに保名やすなを憎にくみました。そして生いけ捕とつたま保名やすなを殺ころしてしまおうとしますと、ふいに向むこうか
ら、

「もしもし、しばらくお待ちまなさい。」
という声こえが聞きこえました。

悪右衛門あくうえもんが驚おどろいて振り返かえると、それは同じ河内国かわちのくにの藤井寺ふじいでらというお寺てらの和尚おしやうさんでした。そのお寺てらは石川いしかわの家代々いえだいいだいの菩提所ぼだいしよで、和尚おしやうさんとは平生へいぜいから大それたこんい懇意あいだがらな間柄まがらでした。

「これはめずらしい所ところでお目にかかりました。どういうわけで、その男ころうを殺ころそうとなさるのです。」

と和尚おしやうさんはたずねました。

悪右衛門あくうえもんはそこで、今日の狐狩きつねがりの次第しだいをのべて、とうとうおしまいに保名やすなにじやまをされて、くやしはなしくつてくやしはなしくつてたまらないという話はなしをしました。

和尚おしやうさんは、静しずかに話はなしを聞きいた後あとで、

「なるほど、それはお腹はらの立つのはごもつともです。けれども人の命いのちを取るといふのは容易よういなことではありません。殊ことに大切な御病人ごびょうにんの命いのちを助けようとしておいでの時とき、ほかの人間にんげんの命いのちを取るといふのは、仏さまのおぼしめしにもかなわないでしょう。そうすると、せつかく助たすかる御病人ごびょうにんが、かえつて助たすからなくなるるまいものでもない。」

こう和尚おしょうさんにいわれると、さすがに傲慢ごうまんな悪右衛門あくうえもんも、少し勇氣ゆうきがくじけました。和尚おしょうさんはここぞと、

「しかし、ただ助たすけるというのが業腹ごうはらにお思いなら、

こうしましょう。この男を今日から侍をやめさせて、
わたしの弟子にして、出家させます。それで堪忍して
おやりなさい。」

といいました。

悪右衛門もとうとう和尚さんに言い伏せられて、
いったん虜にした保名を放してやりました。

やがて悪右衛門の主従は和尚さんに別れを告げて、
また森の中にすっかり姿が見えなくなりますと、
和尚さんは、その時まで、ぼんやり夢をみたように座つ
ていた保名に向かつて、

「さあ、乱暴者どもが行ってしまいました。また見つ

からないうちに、そつと向むこの道みちを通とおて逃にげてい
らっしゃい。わたくしはさつきあなたに助たすけて頂いただ
た、この森もりの狐きつねです。御恩ごおんは一生忘いっしょうわすれません。」

こういうが早いはやか、和尚おしょうさんはもうまた元もとの狐きつねの
姿すがたになつて、しつぽを振ふりながら、悪右衛門あくうえもんたちが
歸かえつていった方角ほうかくとは違ちがつた向むこの森もりの中うちの道みちへ
入はいつていきました。それはさも、自分じぶんについて来こいと
いうようでした。保名やすなはいよいよ夢ゆめの中で夢ゆめを見みたよ
うな心持こころもちちがしながら、うかうかとその後あとについてい
きました。

もう日がとつぷり暮れて、夜になりました。暗い樹
の間から、吹けば飛びそうに薄い三日月がきらきら
と光って見えていました。保名はいつの間にか狐の
行方を見失つてしまつて、心細く思いながら、森の中
の道をとぼとぼと歩いて行きました。しばらく行くと、
やがて森が尽きて、山と山との間の、谷あいのような
所へ出ました。体中にうけた傷がずきんずきん痛
みますし、もう疲れきつてのどが渴いてたまりません
ので、水があるかと思つて谷へずんずん下りていきま

すと、はるか谷底たにぞこに一ひとすじ、白い布ぬのをのべたような
清水しみずが流ながれていて、月つきの光ひかりがほのかに当あたつていま
した。その光ひかりの中にかすかに人らしい姿すがたが見みえたの
で、保名やすなはほつとして、痛いたむ足あしをひきずりひきずり、
岩角いわかどをたどつて下りて行きますと、それはこんな寂さびし
い谷たにあいにもに似にもつかない十六七のかわいらしい少女おとめが、
谷川たにがわで着物きものを洗あらっているのです。少女おとめは保名やすなの姿すがた
を見みるとびつくりして、危あやうく踏ふまえていた岩いわを踏ふみ
はずしそうにしました。それから保名やすなの血ちだらけに
なつた手足てあしと、ぼろぼろに裂さけた着物きものと、それに何なによ
りも死人しにんのように青あおざめた顔かおを見みると、思おもわずあつと

さけび声こゑをたてました。保名やすなは氣きの毒どくそうに、

「驚おどろいてはいけません。わたしはけつして怪あやしいものではありません。大ぜいの悪者わるものに追おわれて、こんなにけがをしたのです。どうぞ水みずを一杯ぱい飲のませて下さい。のどが渴かわいて、苦くるしくつてたまりません。」

といいました。

娘むすめはそう聞きくと大たいそう氣きの毒どくがつて、谷川たにがわの水みずをしやくつて、保名やすなに飲のませてやりました。そしてそのみじめらしい様子ようすをつくづくとながめながら、

「まあ、そんな痛いたましい御様子ごようすでは、これからどこへいらつしやろうといつても、途中とちゆうで歩あるけなくなるにき

まっています。むさくるしい家いえで、おいやでしようけれど、ともかくわたくしのうちへいらしつて、傷きずのお手当てあてをなさいまし。」

といいました。

保名やすなは大たいそうよろこんで、娘むすめの後あとについてその家いえへ行きました。それは山やまの陰かげになつた寂さびしい所ところで、うちには娘むすめのほかになれも人ひとはおりませんでした。この娘むすめは親おやも兄弟きょうだいもない、ほんとうの一人ひとりぼっちで、この寂さびしい森もりの奥おくに住すんでいたのでした。

その明あくる日保名やすなは目めが覚さめてみると、昨日きのううけた体からだの傷きずが一晚ひとばんのうちにひどい熱ねつをもつて、はれ上あがつ

ていました。体中、もうそれは搾木にかけられたよ

うにぎりぎり痛んで、立つことも座することもできませ

ん。そこで保名は心のうちには気の毒に思いながら、

毎日あおむけになつて寝たまま、親切な娘の世話に

体をまかしておくほかはありませんでした。

保名の体が元どおりになるにはなかなか手間がか

かりました。娘はそれでも、毎日ちつとも飽きずに、

親身の兄弟の世話をするように親切に世話をしまし

た。保名の体がすっかりよくなつて、立つて外へ

出歩くことができるようになった時分には、もうとう

に秋は過ぎて、冬の半ばになりました。森の奥の住ま

いには、毎日木枯らしが吹いて、木の葉も落ちつくす
と、やがて深い雪が森をも谷をもうずめつくすようにな
りました。保名はそのままいつしよに雪の中にうず
められて、森を出ることができないでいました。その
うち雪がそろそろ解けはじめて、時々森の中に小鳥
の声が聞こえるようになって、春が近づいてきました。
保名は毎日親切な娘の世話になつてゐるうち、だん
だんうちのことを忘れるようになりました。それから
また一年たつて、二度めの春が訪れてくる時分には、
保名と娘の間にかわいらしい男の子が一人生まれて
いました。このごろでは保名はすっかりもとの侍の

身分みぶんを忘わすれて、朝あさ早くから日の暮くれるまで、家いえのうしろの小さな畑はたけへ出でてはお百姓ひやくしやうの仕事しごとをしていました。お上かみさんの葛くずの葉はは、子供こどもの世話せわをする合間あいまには、機はたに向むかって、夫おつとや子供こどもの着物きものを織おっていました。夕方ゆうがたになると、保名やすなが畑はたけから抜ぬいて来きた新しい野菜やさいや、仕事しごとの合間あいまに森もりで取とった小鳥こどりをぶら下さげて帰かえつて来きますと、葛くずの葉はは子供こどもを抱だいてにつこり笑わらいながら出でて来きて、夫おつとを迎むかえました。

こういう楽たのしい、平和へいわな月日つきひを送おくり迎むかえするうちに、今年ことしは子供こどもがもう七つになりました。それはやはり野面のづらにはぎやすスキの咲さき乱みだれた秋あきの半なかばのことでした。

た。ある日いつものとおり保名は畑に出て、葛の葉
は一人寂しく留守居をしていました。お天氣がいいの
で子供も野へとんぼを取りに行つたまま、遊びほおけ
ていつまでも帰つて来ませんでした。葛の葉はいつも
のとおりに機に向かつて、とんからりこ、とんからりこ、
機を織りながら、少し疲れたので、手を休めて、うつ
とり庭をながめました。もう薄れかけた秋の夕日の中
に、白い菊の花がほのかな香りをたてていました。葛
の葉は何となくうるんだ寂しい気持ちになつて、我を
忘れてうつかりと魂が抜け出したようになっていま
した。その時外から、

「かあちゃん、かあちゃん。」

と呼びながら、遊び疲れた子供が駆けて帰って来ました。うつとりしていて、その声にも気がつかなかったとみえて、葛の葉が返事をしないので、不思議に思つて子供はそつと庭に入つてみますと、いつものように機に向かっている母親の姿は見えましたが、機を織る手は休めて、機の上につつぷしたまま、うとうとうたた寝をしていました。ふと見るとその顔は、人間ではなくつて、たしかに狐の顔でした。子供はびつくりして、もう一度見直しましたが、やはりまぎれもない狐の顔でした。子供は「きやつ。」と、思わずけた

たましいさけび声こえを上げたなり、あとをも見みずに外そとへ
駆かけ出だしました。

子供こどものさけび声こえに、はつとして葛くずの葉はは目めを覚さまし
ました。そしてちよいとうたた寝ねをした間まに、どうい
うことが起おこったか、残のこらず知しってしまいました。ほ
んとうにこの葛くずの葉はは人間にんげんの女をではなくって、あの時とき
保名やすなに助たすけられた若い牝狐めぎつねだったのです。狐きつねは今日きょう
までかくしていた自分じぶんの醜みにくい、ほんとうの姿すがたを子供こども
に見みられたことを、死しぬほどはずかしくも、悲かなしくも
思おもいました。

「もうどうしても、このままこうしていることはでき

ない。」

こう葛の葉はいつて、はらはらと涙をこぼしました。
そういいながら、八年の間なれ親しんだ保名にも、
子供にも、この住いにも、別れるのがこの上なくつら
いことに思われました。さんざん泣いたあとで、葛の
葉は立ち上がって、その障子の上に、

「恋しくば

たずね来てみよ、

和泉なる

しのだの森の

うらみ葛の葉。」

とこう書いて、またしばらく泣きくずれました。そしてやつと思いきって立ち上がると、またなごり惜しそうに振り返り、振り返り、さんざん手間をとった後で、ふいどこかへ出ていってしまいました。

もう日が暮れかけていました。保名は子供を連れて畑から帰つて来ました。母親の変わった姿を見てびっくりした子供は、泣きながら方々父親のいる所を探し歩いて、やつと見つけると、今し方見たふしぎを父親に話したのです。保名は驚いて、子供を連れてあわてて帰つて来てみると、とんからりこ、とんからりこ、いつもの機はたの音おとが聞こえないで、うちの中はひつ

そりと、静まり返っていました。うち中たずね回つても、裏から表へと探し回つても、もうどこにも葛の葉の姿は見えませんでした。そしてもう暮れ方の薄明りの中に、くつきり白く浮き出している障子の上に、よく見ると、字が書いてありました。

「恋しくば

たずね来てみよ、

和泉なる

しのだの森の

うらみ葛の葉。」

母親がほんとうにいなかったことを知って、子供

はどんなに悲^{かな}しんだでしょう。

「かあちゃん、かあちゃん、どこへ行つたの。もうけつ^{わる}して悪いことはしませんから、早く帰^{はや}つて来^{かえ}て下^きさい。」

こういいながら、子供^{こども}はいつまでもやみの中を探^{さが}し回^{まわ}っていました。さつき顔^{かお}の變^かわつたのに驚^{おどろ}いて声^{こえ}を立て^たたので、母親^{ははおや}がおこつて行^いつてしまつたのだと思^{おも}つて、よけい悲^{かな}しくなりました。狐^{きつね}のかあさんでも、化^ばけ物^{もの}のかあさんでもかまわない、どうしてもかあさん^あに会^あいたいといつて、子供^{こども}はききませんでした。

あんまり子供^{こども}が泣^なくので、保^{やすな}名^{こま}は困^{こま}つて、子供^{こども}の手

を引いて、当てどもなく真つ暗やみの森の中を探して
歩きました。とうとう信田の森まで来ると、とうに
夜中を過ぎていました。けっして二度と姿を見せま
いと心に誓っていた葛の葉も、子供の泣き声にひか
れて、もう一度草むらの中に姿を現しました。子供
はよろこんで、あわてて取りすがろうとしましたが、
いったん元の狐に返った葛の葉は、もう元の人間の
女ではありませんでした。

「わたしの体にさわつてはいけません。いったん元の
住みかに帰つては、人間との縁は切れてしまったの
です。」

と葛くずの葉狐はぎつねはいいました。

「お前まえが狐きつねであろうと何なんであろうと、子供こどものためにも、
せめてこの子が十になるまでも、元もとのようにいつ

しよにいてくれないか。」

と保名やすなはいいました。

「十まではおろか一生いっしょうでも、この子のそばにいたいの
ですけれど、わたしはもう二度どと人間にんげんの世界せかいに帰かえ
ることできない身みになりました。これを形見かたみに残のこして
おきますから、いつまでもわたしを忘れずわすにいて下さくだ
い。」

こういつて葛くずの葉狐はぎつねは一寸すん四方ほうぐらいの金きんの箱はこと、

水晶すいしょうのような透すき通とおつた白たまい玉やすなを保名わたに渡わたしました。

「この箱はこの中はこに入はいっているのは、竜宮りゅうぐうのふしぎな

護符ごふです。これを持もつていれば、天地てんちのことも人間界にんげんかい

のことも残のこらず目めに見みるように知しることができま

す。それからこの玉たまを耳みみに当あてれば、鳥獸とりけものの言葉ことばでも、

草木くさきや石いしころの言葉ことばでも、手てに取とるように分わかります。

この二つの宝物たからものを子供こどもにやっ

て下ください。」

といつて、二つの品物しなものを保名やすなに渡わたしますと、そのま

ますうつと狐きつねの姿すがたはやみの中なかに消きえてしまいました。

狐きつねのふしぎな宝物たからものを授さずかつたせいでしようか、
狐きつねの子供こどもの阿倍あべの童子どうじは、並なみの子供こどもと違ちがつて、生まれ
つき大たいそう賢かしこくて、八つになると、ずんずんむずかし
い本ほんを讀よみはじめ、阿倍あべの家に昔むかしから伝つたわつて、だれ
も讀よむ者のなかつた天文てんもん、数学すうがくの巻まき物ものから、占うらいや
医学いがくの本ほんまで、何なんといふことなしにみな讀よんでしまつ
て、もう十三との年としには、日本中にっぽんじゅうでだれもかなうもの
ないほどの学者がくしやになつてしまいました。

するとある日のことでした。童子どうじはいつものとおり

一間ひとまに入はいって、天文てんもんの本ほんをしきりに読よんでいますと、
すぐ前まえの庭にわの柿かきの木きに、からすが二羽ふたは、かあかあいつ
て飛とんで来きました。そして何なにかがちやがちやおしやべ
りをはじめました。何なにをからすはいっているのか知しら
んと思おもって、童子どうじは例れいのふしぎな玉たまを耳みみに当あてますと、
このからすは東ひがしの方ほうから来きた関東かんとうのからすと、西にしの
方ほうから来きた京都きょうとのからすでした。京都きょうとのからすは関東かんとう
のからすに向むかって、このごろ都みやこで見て来きた話はなしをし
ました。

「都みやこの御所ごしよでは、天子てんしさまが大病たいびょうで、大そうなさわ
ぎをしているよ。お医者いしやというお医者いしや、行者ぎやうじやという

行者ぎようじやを集めて、いろいろ手をつくして療治りようじをしたり、
祈禱きとうをしたりしているが、一向いっとうにしるしが見えない。
それはそのはずさ、あれは病氣びようきではないんだからなあ。
だがわたしは知しっている。」

「じゃあどういうわけなんだね。」

と関東かんとうのからすはたずねました。

「それはこういうわけさ。このごろ御所ごしよの建て替かえを
やって、天子てんしさまのお休みやすみになる御殿ごてんの柱はしらを立てた
とき、大工だいくがそそつかしく、東北とうほくの隅すみの柱はしらの下に蛇へびと
蛙かえるを生き埋うめにしてしまったのだ。それが土台石どだいしの
下で、今いまだに生きていて、夜よるも昼ひるもにらみ合あって戦たたかっ

ている。蛇へびと蛙かえるがおこつて吹き出す息いきが炎ほのおになって、
空そらまで立ちたのぼると、こんどは天てんが乱みだれる。その勢いきお
いで天子てんしさまの体からだにお病やまいがおこるのだ。だからあの
蛇へびと蛙かえるを追おい出だしてしまわないうちは、御病氣ごびょうきは治なお
りつこないのだよ。」

「ふん、それじゃあ人間にんげんになんか分わからないはずだな
あ。」

そこで京都きょうとのからすは、関東かんとうのからすと顔かおを見合みあわ
せて、あざけるように、かあかあと笑わらいました。そし
てまた関東かんとうのからすは東ひがしへ、京都きょうとのからすは西にしへ、別わか
れて飛とんでいってしまいました。

からすの言葉ことばを聞いて、童子どうじは早速さつそく占うらいを立ててみると、なるほどからすのいったとおりに違ちがいありませんでしたから、おとうさんの前まえへ出て、その話はなしをして、

「どうか、わたしを京都きょうとへ連れて行いって下ください。天子てんしさまの御病氣ごびょうきを治なおして上げとうございます。」

といいました。

保名やすなもこれをしおに京都きょうとへ行いって、阿倍あべの家いえを興おこす時ときが来きたと、大そうよろこんで、童子どうじを連つれて京都きょうとへ上のぼりました。そして天子てんしさまの御所ごしよに上あがって、お願ねがいの筋すじを申もうし上げました。天子てんしさまも阿倍あべの仲麻呂なかまろの

子孫しそんだということをお聞ききになつて、およろこびになり、保名親子やすなおやこの願ねがいをお聞き届けきとどになりました。そこで童子どうじはからすに聞きいたとおり占うらないを立てたて申し上もうげました。御所ごしよの役人やくにんたちはふしぎに思おもつて、なかなか信用しんようしませんでしたが、何なにしろ困こまりきつているところでしたから、ためしに御寢所ごしんじよの東北うしとらの柱はしらの下を掘ほらしてみますと、なるほど童子どうじのいったとおり、火ひのような息いきをはきかけはきかけ戦たたかっている蛇へびと蛙かえるを見みつけて、追おい出だして、捨すてました。するとまもなく天子てんしさまの御病氣ごびようきは薄紙うすがみをへぐように、きれいに治なおつてしまいました。

天子^{てんし}さまは大^{たい}そう阿倍^{あべ}の童子^{どうじ}の手柄^{てがら}をおほめになつて、ちようど三月^{がつ}の清明^{せいめい}の季節^{きせつ}なので、名前^{なまえ}を阿倍^{あべ}の清明^{せいめい}とおつけになり、五位^いの位^{くらゐ}を授^{さず}けて、陰陽頭^{おんみようのかみ}という役^{やく}におとりたてになりました。後^{のち}に清明^{せいめい}の清^{せい}の字^じをかえて、阿倍^{あべ}の清明^{せいめい}といった名高^{なだか}い占^{うらな}いの名人^{めいじん}はこの童子^{どうじ}のことです。

四

たつた十三にしかない阿倍^{あべ}の童子^{どうじ}が、天子^{てんし}さまの御病氣^{おびようき}を治^{なお}してえらい役人^{やくにん}にとりたてられたと聞^きい

て、いちばんくやしがつたのは、あの石川悪右衛門の
いしかわあくうえもん
に皆さんの芦屋の道満でした。道満はその時まで日本
あしや どうまん どうまん とぎ にっぽん
一の学者で、天文と占いの名人という評判でしたが、
がくしや てんもん うらな めいじん ひようばん
こんどは天子さまの御病氣を治すことができないで、
てんし ごびようき なお
その手柄を子供に取られてしまったのですから、くやし
てがら こども と
しがるのも無理はありません。そこで御所へ上がって
むり ごしよ あ
天子さまに讒言をしました。
てんし ざんげん

「御用心遊ばさないといいけません。あの童子は詐欺師
ごようじん あそ どうじ さぎし
でございます。恐れながら、陛下のお病は侍医の
おそ へいか やまい
かたがた ども たんせい
方々や、わたくし共の丹誠で、もうそろそろ御平癒に
なる時になっておりました。そこへ折よく童子めが
とき おり どうじ

来合きあわせて、横合よこあいから手柄てがらを奪うばっていったのでござ
います。御寝所ごしんじよの下したの蛇へびと蛙かえるのふしぎも、あれら
親子おやこが御所ごしよの役人やくにんのだれかとしめし合あわせて、わざわ
ざ入れて置おいたものかも知しれません。どうか軽々かるがるしく
お信しんじなさらずに、一度どわたくしと法術ほうじゆつくら比べをさせ
て頂いただきとうございます。もしあの童子どうじが負まけました
らば、それこそ詐欺師さぎしの証拠しやうこでございますから、さつ
そく位くらいを取り上あげて、追おい返かえして頂いただきとうございま
す。」

と申し上もうあげました。

「でもお前まえがもし童子どうじに負まけたらどうするか。」

と天子さまは少しおこつて、おたずねになりました。

「はい、万々一わたくしが負けるようなことがござい
ましたら、それこそわたくしの頂いておりますお役
も位も残らずお返し申し上げて、わたくしは童子の
弟子になつて、修業をいたします。」

と、高慢な顔をしてお答え申し上げました。

そこで天子さまは阿倍の清明親子をお呼び出しにな
り、御前で術比べさせてごらんになることになりま
した。道満と清明が右左に別れて席につきますと、
やがて役人が四五人かかつて、重そうに大きな長持を
担いで来て、そこへすえました。

「道満どうまん、清明せいめい、この長持ながもちの中には何なにが入はいっているか、
当ててみよ、という陛下へいかの仰おおせです。」

とお役人やくにんの頭かしらがいました。

すると道満どうまんは、さもとくいらしい顔かおをして、

「清明せいめい、まずお前まえからいうがいい。子供こどものことだ、先さきを譲ゆずってやる。」

といいました。清明せいめいはその時とき、丁寧ていねいに頭あたまを下げ、
「では失礼しつれいですが、わたくしから申し上げあましょう。
長持ながもちの中うちにお入いれになつたのは猫二匹ねこ ひきです。」

といいました。

清明せいめいがうまくいいあてたので、道満どうまんはぎよつとしま

した。

「ふん、まぐれ当たり^あに当た^あったな。いかにも二匹^{ひき}の猫^{ねこ}に相違^{そうい}ありません。それで一匹^{びき}は赤猫^{あかねこ}、一匹^{びき}は白猫^{しろねこ}です。」

長持^{ながもち}のふたをあけると、なるほど赤^{あか}と白^{しろ}の猫^{ねこ}が二匹^{ひき}飛び出^だしました。天子^{てんし}さまも役人^{やくにん}たちも舌^{した}をまいて驚^{おどろ}きました。

今^{いま}のは勝負^{しょうぶ}なしにすんだので、又^{また}、四五人^{にん}のお役人^{やくにん}が、大きなお三方^{さんぼう}に何^{なに}か載^のせて、その上^{あつ}に厚^{ぬの}い布^{ぬの}をかかけて運^{はこ}んで来^きました。道満^{どうまん}はそれを見^みると、こんどこそ晴明^{せいめい}に先^{せん}をこされまいというので、いきり立^たって、

「ではわたくしから申し上げます。お三方さんぼうの上にお載のせになったのは、みかん十五です。」

といいました。

晴明せいめいはそれを聞いて、「ふん。」と心こころの中であざ笑わらいました。そして少すこしいたずらをして、高慢こうまんらしい道満どうまんの鼻はなをあかせてやりたいと思おもいました。そこでそつと物ものを換かえる術じゆつを使つかつて、お三方さんぼうの中の品物しなものを素早すばやく換かえてしまいました。そしてすました顔かおをしながら、

「これはみかん十五ではございません。ねずみ十五匹ひきをお入いれになったと存ぞんじます。」

といいました。天子てんしさまはじめお役人やくにんたちはびつく

りました。こんどこそは晴明せいめいがしくじったと思おもいま
した。そばについていたおとうさんの保名やすなも真まつ青さおに
なつて、息子むすこのそでを引きひきました。けれども晴明せいめいはあ
くまで平気へいきな顔かおをしていました。道満どうまんは真まつ赤かになつ
て、

「さあ、詐欺師さぎしの証拠しょうこは現あらわれましたぞ。中なを早くお
あけなさい、早く。はや」

とさけびました。

お役人やくにんはお三方さんぽうの覆おおいをとりました。するとどうで
しょう。お三方さんぽうの上に載のせたのはみかんではなくつて、
今いまの今いままで清明せいめいのほかだれ一人ひとり思おもいもかけなかつたね

ずみが十五匹^{ひき}、ちよろちよろ飛び出して、御殿^{ごてん}の床^{ゆか}の上^かを駆け歩き^{ある}ました。すると長持^{ながもち}の上に寝^ねていた二匹^{ひき}の猫^{ねこ}が目早く見^みつけて、いきなり飛び^と下りて、ねずみを追^おい回^{まわ}しました。みんなは「あれあれ。」ときけんで、総立^{そうだ}ちになつて、やがて御殿中^{ごてんじゅう}の大き^{おお}わぎになりました。

これで勝負^{しょうぶ}はつきしました。芦屋^{あしや}の道満^{どうまん}は位^{くらゐ}を取り上げられて、御殿^{ごてん}から追^おい出^だされました。そして阿倍^{あへ}の晴明^{せいめい}のお弟子^{でし}になりました。

底本…「日本の諸国物語」 講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力…鈴木厚司

校正…大久保ゆう

2003年9月29日作成

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、
校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで
す。